

近代における高木家文書の調査と活用

Survey and utilization for Takagi Family Documents in modern times

名古屋大学附属図書館研究開発室
Nagoya University Library Studies

石 川 寛
ISHIKAWA, Hiroshi

Abstract

The Takagi Family Documents held at Nagoya University Library was known from before World War II, and was browsed by various people, and it was utilized in various fields such as compilation of history books and exhibitions. In this paper, I summarized the circumstances of what kind of people investigated, organized, and utilized the Takagi Family Documents, in modern times .

Keywords

Takagi Family Documents (高木家文書), Document on flood control (治水関係文書),
The investigation of materials for history (史料調査)

はじめに

本稿では、高木家文書を対象に、調査・活用の観点から、近代における古文書の伝来について考察するものである。

文書群が伝来した高木家は交代寄合の格式を有する旗本であった。関ヶ原合戦の軍功により美濃国石津郡時・多良両郷（現岐阜県大垣市上石津町域）に高木貞利は二三〇〇石、弟の貞友・貞俊はそれぞれ一〇〇〇石の知行所を与えられ、ともに多良郷宮村に陣屋を構えた。高木貞利・貞友・貞俊に始まる家系は、陣屋の位置関係から、西家・東家・北家と称され、三家は明治維新にいたるまで同地を支配し続けた。

高木家が近世初頭から維新期まで、在地にあって同一地域の支配を続けたことから、また幕府の命により木曾三川流域の河道維持と工事監督を職掌としたことから、高木家には旗本領主制に関わる豊富な文書と、木曾三川流域の多様な治水関係文書が蓄積されることになった。

しかし、明治維新後、北家は早くに断絶したため文書が散逸し、東家は昭和初期に多良を離れたとき所蔵文書を手放したようで、現在は数ヶ所の公的機関や個人の所蔵に分散している。これに対して西家の当主であった高木貞正・貞元の父子は多良に居住し続け、所蔵文書を散逸させることなく戦後まで伝えた（以下、特に断らない限り、高木家とは西家を指す、三家を区別するときは西家・東家・北家と称す）。

西家所蔵文書は、戦後、ほぼ一括して名古屋大学の所蔵に帰すことになる。その経緯については伊藤孝幸が関係者に聞き取りをおこない明らかにしているが、一方で明治から敗戦までの、戦前期における高木家文書については、中島俊司による整理（第二章で取り上げる）が知られるのみである。しかし、戦前期に高木家文書に関わったのは中島だけではなかった。高木家では早くから所蔵文書の閲覧希望に応じ、また研究者も調査に訪れ、歴史書の編纂、史料集への掲載、展示会への出陳など、様々な場面で活用されていた。

そこで本稿では、戦前期における古文書の調査・活用に関する事例研究として、旧旗本高木家に伝来した古文書群を取り上げ、戦前期において高木家文書がいかなる人々によって調査・整理され、そして活用されてきたのか整理し、その来歴の一端を明らかにする。

一 高木家文書の貸出記録

近世において高木家の陣屋内の土蔵や書蔵に保管された文書・蔵書は小納戸や書蔵方によって管理された。そして、高木家文書に残る貸出証文から、維新後もしばらくは旧家臣による文書管理が継続していたことがうかがえる。一八七六（明治九）年に治水関係の記録や絵図を貸し出したとき、高木貞正は「御書蔵」宛に証書を認め、返却後は再び「御書蔵」へ納めていた。一八八〇年頃までは元用人の大嶽弁之丞が借用書の宛先になっており、大嶽が文書管理を担っていたと推察される。

明治期の高木家文書の貸出記録をみると、貸出要請には二つの傾向が読み取れる。一つは水をめぐる地域紛争解決のための借用である。

大嶽が文書管理を担っていた一八八〇年頃までは、美濃・伊勢の諸村および行政機関から文書の閲覧や借用の依頼が寄せられていた。水をめぐる紛争を解決するため、先例や過去の裁定を記した史料が必要とされ、木曾三川流域において公儀権力の一翼を担った高木家の所蔵文書が参照されたのである。

そのことを示す史料として国井清廉の借用依頼状を紹介したい。⁷年の記載はないが、「羽栗郡」や「当衙」という文字から、国井の羽栗・中島郡長時代（一八七九―一八三年）のものと判断できる。

不順之氣候候得共益御清適奉万賀候、然者甚御面倒之義二候得共一事願試候事件出来、則左二

○当部内羽栗郡柳津村地内二先年一夜二堤防ヲ新築候義有之、水上障害有之村々ヨリ支障之義申出、百万議論ノ上遂ニ取払相成候事件有之候、其後モ数度右堤ニ就而者入組有之候ニ付、諸書類等沢山有之候、維新之際笠松郡代所ヲ初堤方等之書類紛乱全キモ無之、今日ニ到テハ到底手ニ入難キモノニ候処、今回又々右堤防ニ付テ紛議ヲ生シ、当衙ニ於テモ書類ノ可徴モノ無之、殆困却之余夫々搜索書類ヲ相尋候処、或人ノ申ニハ高木君之御先代者右水利ニ御関係ニテ右書類ハ悉ク御手許ニ必可有之、且御家ニ於テハ決而紛乱等之愁者無之モノト思考候旨ニ付、

如何ニモ御家二者必御保存之事与奉存候間、甚御手数之至候得共、御序ニ御家令等ニ被命、御文庫一応御穿鑿被下、右ニ関係候書類有之候ハ、御通送、暫時御借被下度奉希候、且御序ニ同村検見堤ト申ニ関係之書類等ニ見当相成候ハ、是又同時ニ拝借之程是又相願候、余者期拝面候、恐々頓首

六月八日

高木貞正殿

国井清廉^⑨

柳津村は笠松の西、境川の東岸に位置する。笠松より上郷の悪水や境川の逆流を防ぐことを目的に一二ヶ村で松枝輪中を形成したが、上郷や対岸の村々と堤の築造をめぐってしばしば対立した。

築堤をめぐる対立は明治になっても生じたため、近世の書類を必要としたが、笠松陣屋をはじめ堤方役所（笠松陣屋堤方役は高木三家の川通役と共に流域の水政を担当した）の書類は維新の際に紛乱し、また郡役所にも徴証となる書類がなかった。笠松陣屋文書は笠松裁判所・笠松県を経て岐阜県へ引き継がれ、このうち堤方役所文書の一部は今日に伝わっているが、維新後の混乱した時期にあつては利用できる環境にはなかったことがわかる。そうした状況下において、高木家には治水関係文書が伝来し、維新後も紛乱することなく保管しているとの情報があり、関係書類について国井郡長が照会に及んだのである。なお、書状中にある「検見堤」とは、松枝輪中の北を囲う堤で、やはり近世において争いの対象となっていた堤である。

高木家においてもこうした要請に応えるためであらう、一八八〇年五月二十六日付で、治水関係文書を中心とした「所蔵書類抜萃目録」を作成していた。^⑩

村からの照会では、一八七六年に、伊勢国桑名郡の香取・戸津・脇江の三ヶ村と中須村との間で起きた新川をめぐる出入を解決するため、時郷下山村の三輪孫六・三輪斎治郎を通じて、延享年間の書付二通と無年号の新川目論見書付一通が貸し出されている。^⑪香取村の小前惣代は一八八〇年にも、「宝永二年西六月 勢州桑名郡堤猿尾改帳」と

「堀江荒四郎殿御見分之節模様積替帳」の二冊を拝借していた。^⑫

一八七八年には、旧大垣藩士の水野万蔵の仲介により、本巢郡真桑

村が寛文・貞享期の井水論所に関する文書を借用した。^⑬本巢郡の蒔田・真桑の両用水は、揖斐川の支流である根尾川の水の取り入れをめぐって中世末から頻繁に争論を繰り返していた。高木家は寛文期から幕府評定所の指示により検使役として論所見分にあたったため、両用水に関する文書が残っていた。一七世紀の用水論所見分の文書が近代においても参照されたのである。

高木家文書の貸出要請に関するもう一つの傾向は、歴史書や史料集編纂のための借用が早くからみられたことである。

年末詳の書状によると、岐阜県属の西村元長と人見政意が、高木貞正郡長に対して「木曾本支川二係ル古書類」の閲覧を願ったことが知られる。^⑭西村と人見は、朝田斌と櫛田道古を加えた四人で多良の高木家を六月二十九日から両三日訪問し、調査のため「古書類」を八月末まで借用した。

書状の記述のみでは、彼らが「木曾本支川二係ル古書類」を必要とした理由が判然としない。だが、櫛田の兄である神谷道一（後述）の日記一八八七年六月七日条に「櫛田道古来ル、予而関ヶ原古記及編纂書抜等可取計管相成居候処、土木課ニ於木曾川外二川水路沿革編纂之事出来、至急ヲ要スル為メ、右ニ取掛有之度旨」との記述がみえること、^⑮高木貞正の日記の一八八七年七月一日条に右四人の名前がみえること、また一八八七年当時西村は土木課に所属していたことも勘案すると、岐阜県土木課が進めていた「木曾川外二川水路沿革」の編纂のため四人は一八八七年に高木家を訪問したものと判断できる。「水路沿革」の具体的な内容については不明であるが、これは高木家文書を活用して木曾三川史を編纂しようとした最も早い事例といえる。

この頃になると、中央からも照会が来るようになる。具体的な文書名は不明ではあるが、大蔵省記録局は高木家が所蔵する「旧幕時代之古書類」を閲覧し、一八八六年の返却時に謝金として二円を下付した。^⑯一八八九年には陸軍参謀本部の日本戦史編纂事業に応じて、高木家は蔵書の中から「古来戦闘ニ関スル書籍古文書」を取り調べ、目録を提出した。^⑰

同じ時期に編纂された神谷道一の『関原合戦図志』にも高木家文書が活用された。神谷は可児郡の郡長を皮切りに、恵那郡、大野・吉

城・益田郡の郡長を歴任した官吏で、一八八五年に退官した後は歴史の調査編纂に専念し、『関原合戦図志』や『新撰美濃志』などを刊行した。²⁰ 神谷が関ヶ原の調査を始めたのは一八八六年であり、その翌年に高木貞正から『関ヶ原合戦誌』、『関ヶ原記』、『慶長記』、『参考関ヶ原軍記』および『関ヶ原御合戦図』を借用した。²¹

高木家の陣屋は関ヶ原に近く、また高木三家の祖先が関ヶ原合戦において「案内者」となった軍功により時・多良郷内に加増・知行替えとなった由緒から、同家は関ヶ原合戦に関する書籍や絵図を所蔵していた。陸軍参謀本部へ提示した書籍・古文書も、一八九三年刊行の『関原役』の編纂のためのものであったと思われる。

『関原合戦図志』は一八九二年に出版の運びとなるが、その引用書・参考書目録に高木が貸し出した書籍や絵図も明記されている。²²

そして一八九五年には東京帝国大学の星野恒が西家所蔵文書を借覧することになるが、これについては第三章で取り上げる。

本章の最後に、近代の治水行政と関わって高木家文書に注目した山田省三郎と治水協会について言及しておきたい。以下の記述は秋山晶則、羽賀祥二の研究成果に依っている。²³

美濃国厚見郡佐波村に生まれた山田は、岐阜県会議員や衆議院議員を歴任し、治水事業に奔走した人物である。全国的に治水議論がわき起こる中、一八七九年に西濃地方の有志と治水共同社を結成し、木曽川下流改修工事の促進を図った。さらに帝国議会が開会する一八九〇年には、天龍川治水に献身した金原明善、内務省土木局長の職にあった西村捨造と治水協会を設立し、『治水雑誌』を刊行して世論喚起を促した。²⁴

治水協会設立に際して山田は、高木貞正へ協力を求めるとともに、西村の希望を受けて「貴家二ハ種々参考書多く被為在候事ニも御座候間、何卒古書ノ内参考トも二相成モノハ御贍写」することを依頼した。²⁵ これに対して高木は、治水協会に入会するとともに、所蔵文書の贍写にも応じたようで、一八九〇年十二月十七日発兌の『治水雑誌』第一号には、高木家に伝わる内藤十左衛門聞取書（口上書）が翻刻掲載されている。

内藤は宝暦治水に際して高木家が召し抱えた人物であったが、普請

に赴いてわずか二ヶ月で切腹して果てた。直ちに絶命するにはいたらなかったため尋問書が残された。

宝暦四（一七五四）から着手された宝暦治水は、木曽川と揖斐川を油島新田と松之木村の間で締め切る分流工事が困難を極め、薩摩藩は多額の費用と多数の犠牲者を出して工事を成し遂げたとして伝説化している。この工事が全国的に知られるきっかけとなったのが『治水雑誌』第一号に掲載された記事（「油島ノ切工事ニ関スル経歴始末」）であり、その中で薩摩藩の犠牲者のうち四五名が「割腹人」として初めて公表された。しかし、いづれも史料の根拠を欠くため、割腹した者として確実な史料の残る内藤の聞取書が併せて引用されたのである。

明治期の木曽三川分流工事の先駆的大事業として宝暦治水が位置づけられ、その大工事を証明する事例として犠牲者が「薩摩義士」として顕彰されていくが、その伝説化に高木家文書が関わっていたのである。同時に宝暦治水の伝説化が進むにつれ、歴史学の分野においても工事や内藤の記録が残る高木家文書への関心が高まっていくことになる。

二 治水関係文書の整理

所蔵文書の閲覧に応じていた高木家では、大正期頃から所蔵文書の保存・管理を中島俊司に依頼し、その中島によって治水関係文書の目録が作成されることになる。

中島は一八九六（明治二十九）年、岐阜県安八郡塩喰村（翌年合併して福束村となる、現在の輪之内町）に生まれた。大垣中学校、第八高等学校から東京帝国大学に進み、一九二一（大正十）年に国史学科を卒業した。黒板勝美の門下生になる。卒業後は郷里に戻り、岐阜県における自治体史の草分けとなる『岐阜市史』（一九二八年）をまとめ、『美濃国史料』（一九三四、三七年）の編纂者の一人となり、戦後は岐阜県文化財保護協会副会長等を務めた。また、一九三九（昭和十四）年から大垣共立銀行監査役に就任し、一九四四年一月から一九四六年十一月までは福束村村長として敗戦前後の村政を主導した。一九七三年十二月に他界した。²⁶

中島自身が語っているところによると、一八九六年に大垣共立銀行が設立されたとき、俊司の先代と共に高木貞正が発起人として名前を連ねた関係から、俊司は早くから高木家文書の閲覧の機会を得、大正末頃には高木家から保存方法について意見を求められ、また管理方を依頼されていたという。大正末頃というと、高木家では貞正から貞元へ代替わりした時期にあたる。

そして中島は高木家文書の保存について、師である黒板勝美に相談した。黒板は戦前の歴史学界の泰斗であり、日本古文書学を確立し、また史跡や文化財の調査・保存に尽力しその基礎を定めた。黒板は古文書調査に際しては目録整備と現地保存を重視し、その姿勢を中島も受け継いでいる。中島からの相談に対して黒板は治水関係文書の保存の必要性を説き、「それに先立つて、どんなものがあるか、現在目録を取る必要がある」と助言したという。²⁸

このとき先例となったのが醍醐寺古文書調査であった。黒板が責任者となり一九一四年から醍醐寺古文書調査が始まり、そこでは「散逸を防ぐ為の第一着手として現在目録」が作成された。³⁰中島は初年度から一九六九年までこの調査に参加しており、時には黒板の代理として庫の開封に立ち会い、また『醍醐寺略史』や『醍醐雜事記』を手掛けた。

こうして中島は、醍醐寺古文書調査に並行して、高木家文書中の治水関係文書についても「現在目録」の作成に着手することになる。調査・整理は一九三二年から一九三六まで五年にわたって取り組まれ、最後の二年は黒板が所長を務める日本古文化研究所（一九三四年設立）の事業として補助を受けた。

実際の作業は黒板の教えを受けた東大国史学科の学生を動員して実施された。毎年夏に二週間程度、大垣の寺院の一室を借り、そこに文書を選び込んで目録を採取した。喜田新六（一・二年目）、塩見薫（三年目）、大野達之助（四年目）、横井保平（五年目）が主任となり、大谷幸雄、吉村宮男、一瀬浩、風間泰男、岡本堅次、梅田嵩、沼田次郎、花田雄吉、松岡喜代志、水上一久、吉村宮男、田中久夫、石上韶、磯貝正義、遠藤修平、平久保章、松本亮、高柳知足、金武不二夫、鬼塚正二、千村保、芳即正、遠山茂樹、田丸秀治、児玉照春、大

竹正三郎、五十里精一ら錚々たるメンバーが参加した。

名古屋大学附属図書館にはこのときの調査カードが伝わっている。調査後、高木家（もしくは中島家）に留め置かれたものが、文書と一緒に名古屋大学へ引き継がれたのであろう。

旗本時代の高木家では、関連文書を紙袋に詰め、または包紙に包んで整理・保管しており、今回の調査ではそれら一括文書ごとに整理番号を付し、その内容をカードに書き留めた。その上で、毎年調査の終わりに、整理番号・一括文書の表題・点数を並べた整理総目録を作成した。たとえば整理番号一は「嘉永五年 加納輪中、河渡村生津村外五ヶ年ヨリ下奈良へ対スル差障り一件及び之ニ関スル長良川通治水」三三点であり、これは現在の「E・3・(1)・3710あゝめ」に該当する。なお、一年目のみ地図目録も残っている。こうして五年間で三六四包・一万九六二点の目録を採取した。

最終年度終了後、中島は『日本古文化研究所事業報告』において、次のように成果と課題を述べている。³¹

本年度の調査は前年上半期に於ける調査を承け八十二包、一、九五七点の文書を採録したりしが、其の大部分は文化・文政・天保等幕末時代の川通御用書類并に伺書類等なり。而して既往五ヶ年間に調査したるものと合すれば一〇、九六二点に達す。之を以て西高木家所蔵治水関係文書の目録採録は一段落を告げたるものと称して差支なかるべし。但し従来調査に於ては所謂宝暦治水事件たる薩摩藩御手伝普請に関する文書は比較的少く意外の感を深くしたりしが、之に関しては高木家の所蔵にして未整理に属する川通御用日記、蒼海記、両代官御状留記録等の表題を有する記録類長持に一棹ありて、之が調査に依り宝暦治水事件の全貌を知るべき有力なる資料を発見し得らるゝ、見込なり。尚東高木家旧蔵の文書も従来調査し来れる西高木家文書と同性質のものなるべきに由り、将来併せて調査すべきものとす。

中島においても宝暦治水への関心が高かったことがうかがえるが、

宝暦治水に関する文書は意外と少なかったようで、比較的まとまっていたため整理対象から外した記録類に「宝暦治水事件の全貌を知るべき有力なる資料」を発見できる見込みがあると述べている。また、現在でも課題となっている、東高木家文書との総合調査の必要性をこの時点で指摘していることは注目に値する。

中島による文書整理の意義をまとめれば、第一に高木家文書保存の出発点となったことがあげられる。所蔵文書の閲覧・貸出に応じていた高木家では、大学で専門知識を身につけた中島にその保存・管理を依頼し、中島は黒板の指導のもと保存の前提となる現状の把握、すなわち「現在目録」を作成し、高木家文書の現地保存に努めた。そして「先生の御意見に従って郷土の史料はその郷土に於て保存する方法を樹立すべきであることを念願して久しきに及んだ」³²中島の仲介により、戦後、高木家文書は地元の名古屋大学に引き継がれるのである。

第二に、治水関係文書の全貌がほぼ明らかとなり、その学術的価値が示されたことで、活用への道が拓けたことである。中島らが採取した目録は活字として刊行されることはなかったようであるが、目録カードと整理総目録は現地に留め置かれ、木曾三川流域史研究に活用された。

その一例として岐阜県による治水史編纂がある。一九三九年八月二十九日、岐阜県知事宮野省三は治水史の編纂のため高木貞元に所蔵文書の借覧謄写を依頼した。³³

拝啓残暑劇甚之候愈々御健勝奉慶賀候、扱唐突ながら貴殿には治水に関し貴重なる古文書多量に御所蔵相成居候趣拝承いたし居り候処、今回本県に於て治水史の編纂に着手致度、就てハ御所蔵の該文書中、資料として借覧謄写之御承諾を得度、一度御目にかゝり御依頼申上度存候も、不取敢平井河川課長為伺出候間、何卒宜敷御頼み申上度候 敬具

昭和十四年八月廿九日

岐阜県知事宮野省三

高木貞元殿

高木貞元はこの申し出を承諾したようで、岐阜県から河川課長や治

水史編纂員・嘱託らが高木家を訪問し、治水関係文書の閲覧・借用・撮影を繰り返していった。³⁴このとき岐阜県は中島らが作成した整理総目録を清書し、その整理番号にもとづき高木家から文書を借用した。こうして編纂されたのが『岐阜県治水史』である。同書は岐阜県から委嘱された伊藤信・森義一・大野勇の三氏によって一九三九年から二年半の歳月をかけてまとめられた。³⁶同書の編纂において高木家文書が中心的な役割を果たしたことは知られていたが、その際、中島の成果にもとづき高木家文書が活用されたのであった。

三 史料編纂掛の史料探訪

東京帝国大学の史料編纂掛（現在の史料編纂所）は全国的な史料探訪をおこなう中で戦前に高木家所蔵の貴重史料を調査した。

高木三家には、それぞれの家に戦国から織豊期・江戸初期にかけての、斎藤義龍、織田信長・信忠・信雄、豊臣秀吉、徳川家康らの書状や知行充行状等が伝来しており、これらの古文書（便宜的に「初期文書」と呼ぶ）は治水関係文書と並んで関心を集めていた。その初期文書を明治期に調査したのが帝国大学文科大学教授の星野恒であった。

星野は一八九五（明治二十八）年四月に帝国大学文科大学に史料編纂掛が設置されると、三上参次・田中義成とともに史料編纂委員に就任した。その直前の三月六日、星野は「学術上取調」のため、愛知・岐阜両県への出張を命ぜられた。³⁷出張に先立ち多芸・上石津郡役所を通じて高木家へ「今尾城二関スル信長ノ書」、「明智光秀誅伐二関スル

秀吉ノ書并本多平八郎ノ書」、「蟹江落城二関スル家康ノ書」、「駒野城二関スル信雄ノ書」の借覧を依頼した。³⁸このとき郡役所は「至急借入方御執計、当衙へ御送付相成度」と依頼しているので、星野は多良の高木家ではなく、郡役所において史料を閲覧したようである。

史料編纂掛では貴重史料については借用し、複製を作成した。このときも次の十一（八通・一卷・二軸）³⁹の文書を借用し、七月に影写を終えて、九月に返却している（番号は石川がつけた）。

① 六月十四日 本多平八郎忠勝書 高木権右衛門宛 一通

- ② 天正二年十二月九日 信長書（朱印） 高木彦左衛門宛 一通
- ③ 七月二日 信長書（黒印） 高木権右衛門宛 一通
- ④ 二月朔 信長書（黒印） 吉村名字中外三人宛 一通
- ⑤ 四月廿四日 信長書 高木直介宛 一通
- ⑥ 天正八年十月 信忠書 一通
- ⑦ 卯月廿一日 秀吉書 高木権右衛門宛 一通
- ⑧ 六月廿八日 秀吉書 高木権右衛門宛 一通
- ⑨ 写雜記 一卷
- ⑩ 六月廿日 家康書 高木権右衛門并同名衆中宛 一軸
- ⑪ 五月七日 秀吉書 高木権右衛門宛 一軸

事前に照会した古文書のうち「今尾城二関スル信長ノ書」は④、「本多平八郎ノ書」は①、「蟹江落城二関スル家康ノ書」は⑩が該当する。「明智光秀誅伐二関スル秀吉ノ書」は東家（後掲の⑧）、「駒野城二関スル信雄ノ書」は法泉寺の伝来文書であったため、提供できていない。⁴¹このとき東家から史料提供はなかったようで、その代わりとなったのが写雜記（⑨）であった。写雜記は東家伝来の初期文書を書写したものであり（ただし七通目途中から後欠）、その中に「明智光秀誅伐二関スル秀吉ノ書」も含まれていた。

星野の史料採訪は美濃全域を対象としたものではなかったため、大正期に改めて史料採訪が計画され、史料編纂官渡辺世祐と史料編纂補助嘱託高橋隆三が、一九二〇（大正九）年十月に岐阜・大垣二市と西濃九郡を、一九二三年三月に東濃四郡を巡回した。このとき西濃地方の史料採訪の一環として、一九二〇年十月下旬に養老郡多良村の高木貞元家（西家）と高木貞一家（東家）を訪れ、所蔵史料を調査し、明治期の調査では洩らした西家の初期文書および東家の初期文書を確認した。渡辺の高木家訪問に同行した中島俊司によると、このとき高木貞一は神戸市に居住していたため、旧家臣が庫を開けて文書を見せたという。⁴³

翌年三月、編纂中の『大日本史料』の参考に資するため、史料編纂掛事務主任・史料編纂官辻善之助の名義でもって両家へ史料の借用を願い、謄写・影写の上、翌年九月二十二日に返送した。このとき借用

した史料は次の通りである。

西家

- ⑫ 「家康様御書」 九月廿八日家康花押 高木権右衛門宛 一通
- ⑬ 慶長六年八月四日 大久保十兵衛知行書立 一通
- ⑭ 戊二月七日伊熊等五人連署 高木右京外三人宛 一通
- ⑮ 戊二月廿三日伊熊等四人連署 高木権右衛門宛 一通
- ⑯ 「土方彦三郎殿書状 二通」 二通
- ⑰ イ、五月廿四日 土方勘兵衛雄良花押 御四人衆宛
- ⑱ 口、天正十二年四月廿五日 雄良花押 高木権右衛門宛
- ⑲ 「天正十四年信雄公ヨリ被下候黒印一卷」 一通

- ⑲ 二月六日 本多佐渡守正信花押 高木平兵衛宛 書状 一通
- ⑲ 極月廿五日 本多上野介正純花押 高木平兵衛宛 一通
- ⑲ 朝鮮陣ノ節御朱印 天正廿年三月十三日朱印 一通
- ⑲ 「上総国高御領地御拝領」 慶長二年九月吉日 高木宛 一通
- ⑲ 文禄四年八月朔日 彦坂小判部・大久保 花押 高木権右衛門宛 一通
- ⑲ 「秀忠様御書」 九月晦日 秀忠 高木権右衛門宛 一通
- ⑲ 「北伊勢桑名郡ノ内御黒印」 天正十四年七月廿三日黒印 一通
- ⑲ 「伊勢国飯明郡 御書付」 天正十二年十月十三日 曾我文二郎外二名連署 一通
- ⑲ 「台徳院様御内書二通」 計二通
- ⑲ イ、六月七日 黒印 高木平兵衛宛
- ⑲ 口、三月二十五日 黒印 同
- ⑲ 「成瀬小吉殿状老通」 二月五日 成小吉花押 高平兵衛宛 一通
- ⑲ 「高木新兵衛尉殿」 寛永六年八月八日朱印 高木新兵衛尉殿 一通
- ⑲ 御判物類写 一冊
- ⑲ 先祖書 一冊
- ⑲ 先年々御用蒙仰候御奉書并諸書付等ノ写 一冊
- ⑲ 蒼海記 計十三冊
- ⑲ 川通御用日記 内藤十左衛門ノ日記 一卷
- ⑲ 写雜記 一卷（Ⅱ⑨）
- ⑲ 内藤十三衛門旅宿桑名郡五明村百姓彦八ヨリ高木新兵衛内赤

尾利左衛門ニ差出シタル書 一通

③⑦ 同人死体検案書 一通

③⑧ 同親類ノ死体及ビ所持品受取書 一通

③⑨ 同人付添竿取足軽大嶽善左衛門ノ口上書 一通

④⑩ 同小者平五郎ノ申立書 一通

東家

(1) 書上系図書 写 一卷

(2) 先祖書略抜記 一冊

(3) 天正八年十月日信忠花押 駒野町市安堵状 一通

(4) 永祿十、十一月日 花押 高木彦左衛門宛 一通

(5) 天正十四年七月廿三日信雄黒印 高木彦介宛 一通

(6) 天正十二年五月廿一日信雄花押 高木四家宛 一通

(7) 天正八年十一月 信忠花押 高木彦左衛門宛 一通

(8) 六月十九日 羽筑秀吉花押 高木彦左衛門宛 一通

(9) 七月晦日 信雄花押 高木権右衛門外三人宛 一通

(10) 十月廿三日 信雄花押 宝泉寺宛 一通

(11) 十二月四日 粟津右近花押 高木彦尉宛 一通

(12) 十二月五日 伊賀伊賀守秀通花押 土方勘兵衛宛 一通

(13) 弘治二 九月廿日 新九郎高政花押 高木直介宛 一通

(14) 五月十八日 治部卿法印願 花押 高木彦介宛 一通

(15) 天正九霜月十日 信忠花押 高木彦左衛門宛 一通

(16) 天正十九年十一月十二日 黒印 一通

(17) 天正十年七月廿五日 信孝花押 高木彦左衛門宛 一通

(18) 天正十九年十一月 高木衆 一通

(19) 八月十一日 松平左衛門大夫花押 高木藤兵衛宛 一通

(20) 二月十八日松平左衛門大夫花押 高木藤兵衛宛 一通

(21) 「大御所様御書」 吉宗花押 中山大納言宛 一通

(22) 寛永六年八月八日 朱印 高木藤兵衛宛 一通

(23) 三月廿五日 黒印 高木藤兵衛宛 一通

(24) 六月七日 黒印 高木藤兵衛宛 一通

(25) 覚書 高木藤兵衛宛 一通

(26) 覚書 東照宮御合戦記 一通

(27) 「朝鮮国内裏并陣場之図」 図五枚 幕ギレ二枚 一箱

(28) 朝鮮人來聘ノ節江戸席絵図 一枚

(29) 十月十日山本平六 松平右衛門督宛古合戦ノ義ヲ書キシモノ 一通

(30) 信長公御一代御合戦之覚 一卷

(31) 琉球人登城并上野御宮参詣行列 一冊

(32) 寛永十八年六月廿六日 高木伝助 家系 一枚

(33) 「御先祖書入」 一通

(34) 九月十三日 大石内蔵介 普門院宛 一軸

これらの内容を見ると、第一に西家・東家とも共通して初期文書―すなわち戦国から織豊・近世初期にかけての書状・充行状等を取り上げるとともに、その写（御判物類写）や初期文書を用いた編纂物（先祖書）、合戦記（東家）も借用しており、高木家の出自や天下人の動向、中世から近世にかけての美濃の様相を示す史料を網羅的に調査していたことがわかる。

初期文書は高木家の由緒や出自を示すものとして各家で大切に保管され、寛政期以降の系譜編纂において活用された。その際、元祖と二代目を同じくする高木三家では、各家に伝来する初期文書を照合し、先祖の事績を考証した。御判物類写（③⑪）はそうした中で作成された一冊であり、失われた北家文書を含む高木三家および法泉寺の初期文書も掲載されているため、今日においても貴重である。これらの初期文書は『大日本史料』の編纂に活用されたほか、多くが『養老郡志』や『岐阜県史 史料編』⁴⁵に翻刻掲載されたことで一般に知られるようになる。

第二に西家においては、治水関係文書（③③～④⑩）にも調査が及んでおり、中でも宝暦治水のとき自刃した内藤十左衛門に関心が集中していることがわかる。史料編纂掛においても宝暦治水への関心が高まっていたことを示している。

第三に東家においては朝鮮国内裏・陣場図や通信使の席絵図、琉球使節行列図など朝鮮・琉球関係の史料にも調査が及んでいた。なお、(34)は大石内蔵助の真筆で『赤穂義士史料』下巻⁴⁶や『史林聚芳』第五輯⁴⁷

に掲載された。

右のうち西家の史料は写雜記を除いてすべて現存しているが(31)(32)は高木家所蔵、(33)~(40)は名古屋大学附属図書館所蔵、残りは個人蔵)、東家の史料で原本の存在を確認できたのは、(33)御先祖書入(筒井東27)と(31)琉球人登城井上野御宮参詣行列(國立臺灣大學圖書館所蔵)の二点のみであった。

四 初期文書の活用

史料編纂掛の史料採訪により西家・東家に伝来する初期文書が確認されたことで、その後の活用の道が拓けることになった。

中でも特に貴重とされ、多くの場面で活用されたのが、織田信長書状(2)(3)(4)(5)(4)、豊臣秀吉朱印陣立書(21)、朝鮮国内裏井陣場之図(27)の三種である。

まず、信長書状からみていくことにする。⁴⁸一九三一(昭和六)年が信長の三百五十年忌にあたることから、信長の遠忌を記念し、その偉業遺徳を発揚するため、岐阜保勝会が美濃国内に現存する信長の遺文・遺物の写真を収載した『岐陽遺文』を刊行した。同年には尾張において、名古屋温故会が『尾張国遺存織田信長史料写真集』を刊行しており、美濃と尾張の両国で競い合うように信長史料の写真集が編纂された。

このうち『岐陽遺文』には西家と東家が所蔵する信長文書五通すべてが収録された(三高木丞助宛書状⑤、十一高木彦左衛門本領安堵状④)、二十鷹野鉄砲許可状②、二十一今尾城諸士宛下知状④、二十四高木権右衛門尉宛文書③、漢数字は『岐陽遺文』の番号、文書名は同書に依る)、『岐陽遺文』が収載する写真は古文書・制札・廟所など二九点であり、そのうち五点を高木家文書(西家四通、東家一通)が占めた。岐阜保勝会は数通の古文書の採否にあたっては史料編纂官の渡辺世祐の指導を仰いだとあり、渡辺による史料採訪の成果が反映された一冊であった。⁴⁹

この一〇年後の三百六十年忌に際しては、名古屋市が織田信長公顕彰展覧会・景仰祭および講演会を開催した。会場は鶴舞公園内の公会

堂、期間は一九四一年十月三十日から十一月三日までである。時局に鑑み国運と文化の進展に寄与した偉業を顕彰するとあり、戦時下の国威発揚を目的とした式典であった。その開催に先立ち名古屋市長縣忍は高木貞元に対して所蔵の信長文書四通の展覧会への出陳を依頼し、貞元は快諾した。⁵⁰こうして名古屋においても西家伝来の信長書状が公開されたのである。

さらに戦後の一九五三年にも、三百七十年忌を機縁として岐阜まつり振興会と岐阜タイムスが信長祭を挙行するに際し、信長書状の借用を高木貞元に願ひ出ていた。⁵¹今回は新生日本の建設にあたり「近代的英雄」である信長の偉業をしのぶとあった。敗戦をはさんで信長の位置づけが転回しているが、一〇年ごとの年忌を機に信長が回顧され、高木家に伝来した信長書状が公開されたのである。

次に、豊臣秀吉朱印陣立書も耳目を集めた。同陣立書は天正二十(一五九二)年の朝鮮出兵(文禄役)における軍勢の配置を定めた陣立書である。⁵²

すでに史料編纂掛が影写のため借用した折に注目し、借用中の一九二二(大正十一)年五月に開催した史料編纂掛の史料展覧会に陳列することを高木貞元に願ひ出ていた。⁵³

その後、一九三九年に開催された徳川美術館主催の文禄戦役展覧会にも陣立書が出陳された。⁵⁴

一九四二年四月二十八日からは、大阪市と大阪毎日新聞社の共同主催による「大東亜への回想 豊公大展覧会」が、大阪城天守閣を会場として開催された。中部軍司令部・大阪師団司令部・大阪警備府が後援、財団法人豊公会が協賛しており、戦時色が色濃く反映されていたが、展示内容は充実しており、国宝・重要美術品を含む宸影・宸翰、木像・画像、神号、自筆を含む書状、文禄・慶長役資料、海外発展資料、桃山芸術(屏風や太刀、衣裳、出土品など)一〇〇点以上を一堂に集めた大規模な展覧会であった。ここで文禄・慶長役資料の一つとして豊臣秀吉朱印陣立書が出陳された。⁵⁵

最後に東家に伝来した朝鮮国内裏井陣場之図にも言及しておきたい。

植民地統治下の朝鮮京城府において、一九二六年から府史の編纂が

始まり、一九四一年までに全三巻の刊行を終えた⁵⁶。その初巻、すなわち太古より統監政治開始直前にいたる京城の沿革概要を叙述した第一巻の口絵の一枚として、朝鮮国内裏并陣場之図が掲載された。これは渡辺世祐の史料採訪により史料編纂掛で模写した同図を口絵としたものであった⁵⁷。本図は東家初代の貞友が、加藤光泰に従って文禄役に出征した折、京城滞在中に自ら描いた図との箱書きがあった。口絵の解説には「日軍の明軍に備へた形勢を見るに足り、本図が文禄二年正月二十六日碧蹄館役前後のものであつて、貞友自身の手によつて製せられた地図であることも明瞭」とあり、最古の京城古図と評されていた。

朝鮮国内裏并陣場之図に注目したもう一人の人物が徳富蘇峰であった。徳富も史料編纂掛において渡辺より朝鮮国内裏并陣場之図を拝見し、模写および写真撮影と将来的に『日本国民史 朝鮮役』の巻中に挿入することの許可を高木貞一へ求めていた⁵⁸。

おわりに

近世に川通御用を務めた高木家が治水関係文書を所蔵していることは早くから知られており、明治前期から地域の村々の要請に応じて貸し出されていた。いわば地域史料として活用される一方で、近代の木曾川改修工事という課題の中で近世治水史を解き明かす史料として高木家文書が注目され、特に宝暦治水と薩摩義士が伝説化するにおいて高木家文書への関心が高まっていた。

一方で戦国期に出自をもつ高木家には、中世から近世にかけての美濃の様相を示す戦国武将の発給文書や朝鮮出兵に関わる絵図等が伝来しており、やはり早くから関心を集めていた。それら初期文書は名古屋大学に受け継がれなかったため、同大学の高木家文書整理事業の中で語られることはなかったものの、戦前期においては治水関係文書と並ぶ存在であった。

西家の当主であった高木貞正・貞元父子は、こうした高木家文書の価値を理解して保存に尽力し、黒板勝美の薫陶を受けた中島俊司に保存・管理を依頼した。美濃の郷土史研究の発展に寄与した中島によ

り、治水関係文書一万余点の目録採取がおこなわれ、木曾三川治水史料の宝庫としての高木家文書の価値が学術的に明らかとなった。これらの治水関係文書は、中島の計らいにより、戦後分散することなく名古屋大学附属図書館に受け継がれた。

また、初期文書は史料編纂掛の史料採訪によつて全貌が明らかになり、高い評価が与えられた。特に、美濃・尾張における信長顕彰、戦時中の秀吉回顧という時代状況の中で、高木家所蔵の信長文書や秀吉の陣立書は繰り返し展示会に出陳された。

古文書が史料として活用されるには、調査・整理され、広く一般に公開されなければならず、また公開され、活用されることで古文書の史料としての価値・評価も定まってくる。高木家においても、調査・整理・活用というサイクルの中で所蔵文書の価値を認識し、その保存に努めていったのではないか。

高木家文書は、戦後、名古屋大学附属図書館によつて五万点余が整理された。それにより木曾三川流域における治水史料の宝庫であることが改めて確認されとともに、支配関係文書と家政関係文書も豊富に現存していることが明らかとなり、江戸時代全期間を通じての、旗本領主制の様相を知り得る貴重な文書群という新たな価値がみいだされることになる。

- (1) 一八七一年に高木家の家督を継いだ高木貞正は、学区取締を経て一八七九年二月に多芸・上石津郡の初代郡長に任命され、一八九三年十二月まで一五年にわたつて郡行政を司つた。郡長退職の翌年には衆議院議員を一期務め、晩年には養老郡会議長や多良村長の職にあった。また、この間、郡教育会の会頭や濃飛私立衛生会の地方委員、多芸輪中水利土功会議長なども務め、大垣共立銀行や濃飛農工銀行の設立にも関わる。一九二〇年三月に七〇歳で死去した折、多良村は村葬でもつてその功績を讃えた。

後を継いだ貞元も多良村長や多良村会議員を歴任する一方で養老郡農会幹事や多良消防組頭を務め、また帝国在郷軍人会の分会長として長年分会員を指導し、敗戦後の一九四九年に六二歳で死去した。

- (2) 伊藤孝幸「名古屋大学による高木家文書購入の顛末」(名古屋大学附属図

- 書館報『館燈』一〇八、一九九二年）、同「本学による高木家文書購入の顛末」（高木家文書調査報告（補遺の二））（『名古屋大学古川総合研究資料館報告』八、一九九二年）に収録）、同「戦後における近世史料類の収集過程―名古屋大学附属図書館所蔵高木家文書の場合―」（『歴史の理論と教育』八九、一九九四年）、同「名古屋大学による高木家文書購入の一件について―文学部創設後の諸相を交えての聞き取り調査報告―」（『名古屋大学古川総合研究資料館報告』一〇、一九九四年）。
- (3) 『高木家文書目録』巻一（名古屋大学附属図書館・高木家文書調査室、一九七八年）解題一二頁。
- (4) 高木家文書の典拠は次のように略記し整理番号を記す。それぞれの内容や伝来、目録については、高木家文書デジタルライブラリー (https://libdb.nul.nagoya-u.ac.jp/info/lib/meta_pub/G0000011Takagi) を参照のこと。
- 名古屋大学附属図書館所蔵Ⅱ名図（補遺は整理中）。
- 高木貞勝氏所蔵高木家文書Ⅱ高木（一部目録未公開）。
- 筒井稔氏所蔵東高木家文書Ⅱ筒井東。
- 旗本西高木家陣屋跡主屋棟下張文書（大垣市所蔵）Ⅱ棟下張。
- 福長氏旧蔵西高木家文書（大垣市所蔵）Ⅱ福長。
- (5) 名図F・8・(1)・3333い、同3333こ。
- (6) 名図F・8・(1)・266、同334、同430。棟下張1―7―4、同1―3―7、同1―7―5。
- (7) 名図補遺F・8・(1)・428。
- (8) 『ふるさと笠松』（笠松町、一九八三年）三〇五―三一二頁。
- (9) 『飛騨・美濃の古地図と史料―飛騨郡代高山陣屋文書・美濃郡代笠松陣屋堤方役所文書―』（岐阜県教育文化財団歴史資料館、二〇〇八年）。
- (10) 名図F・8・(1)・265。
- (11) 名図F・8・(1)・334。
- (12) 名図F・8・(1)・266。
- (13) 名図補遺F・8・(1)・430。棟下張1―7―4、同1―3―7、同1―7―5。
- (14) 名図補遺H・1・(3)・5333、同4333。
- (15) 可児光生「神谷道一『関ヶ原合戦図志』編纂をめぐる」（『年報近現代史研究』一〇、二〇一八年）より引用。引用に際して旧字体は新字体に改めた。
- (16) 名図H・2・(3)・10。
- (17) 『明治期岐阜県職員録 その二』（岐阜県郷土資料研究協議会、一九八七年）。
- (18) 棟下張1―3―8。
- (19) 棟下張1―6―33。
- (20) 前掲・可児光生「神谷道一『関ヶ原合戦図志』編纂をめぐる」。
- (21) 名図F・8・(1)・335、同H・1・(4)・16。
- (22) 神谷道一『関ヶ原合戦図志』（小林新兵衛発行、一九九二年）。
- (23) 秋山晶則「高木家文書調査報告（補遺の十）」（『名古屋大学博物館報告』一六、二〇〇〇年）。羽賀祥二「治水の神の誕生―宝暦薩摩義士と木曾三川流域―」（『歴史学研究』七四二、二〇〇〇年）、同「宝暦治水工事と〈聖地〉の誕生」（『名古屋大学附属図書館研究年報』三、二〇〇四年）。
- (24) 『農業土木古典選集8巻 治水論』（日本経済評論社、一九八九年）の解題（宮崎忠・石崎正和執筆）。
- (25) 名図補遺H・1・(3)・592。
- (26) 中島俊司については以下を参考にした。『復刻版 輪之内町史』（輪之内町、一九八八年）。『郷土の輝く先人』上巻（輪之内町、二〇〇四年）。『大垣共立銀行百年史』（株式会社大垣共立銀行、一九九七年）。三成重敬「醍醐寺三十五年」（醍醐寺文化財研究所『研究紀要』九、一九八七年）。中島俊司「高木文書の整理」（黒板博士記念会編『古文化の保存と研究』、一九五三年）。前掲・伊藤孝幸「本学による高木家文書購入の顛末」。
- (28) 前掲・中島俊司「高木文書の整理」二〇三―二〇四頁。
- (29) 醍醐寺文化財研究所編『醍醐寺文化財調査百年誌』（勉誠出版、二〇一三年）。佐和隆研「醍醐寺古文書、聖教調査の足跡」（醍醐寺文化財研究所『研究紀要』一、一九七八年）。三成茂敬「醍醐寺の古文書記録等の調査」（前掲『古文化の保存と研究』に収録）。
- (30) 前掲・三成茂敬「醍醐寺の古文書記録等の調査」五三頁。
- (31) 『昭和十一年十一月 日本古文化研究所事業報告』。
- (32) 前掲・中島俊司「高木文書の整理」二〇八頁。
- (33) 高木158（仮番号）。
- (34) 高木159―161（仮番号）。

- (35) 高木家に岐阜県野紙に清書された「濃勢尾三川普請 西高木家古文書総目録 自昭和七年至昭和十一年整理分」一冊が伝わっている（高木140、仮番号）。
- (36) 上下巻。編纂事務室の閉鎖は一九四二年三月であったが、戦況の悪化により刊行は一九五三年三月となった。
- (37) 岐阜県への史料採訪については、『岐阜県史 史料編 古代・中世Ⅱ』（岐阜県、一九六九年）の「解説と解題」および『東京大学史料編纂所史料集』（東京大学史料編纂所、二〇〇一年）に依る。なお、史料編纂掛が史料編纂所と改称されるのは一九二九年である。
- (38) 名図補遺F・8・(1)・436。
高木144あゝい（仮番号）。
- (39) 法泉寺は伊勢国桑名郡香取（三重県桑名市、旧多度町）に所在する高木家の檀那寺である。本書状は『多度町史 資料編2 近世』（多度町、二〇〇四年、四〇頁）に翻刻掲載されており、天正十二年の小牧・長久手の戦いとき、駒野城を守る高木への援軍を法泉寺に命じたことを伝える八月十九日付織田信雄書状になる。高木三家に関わる初期文書の一つとして、近世期から高木三家においても把握されており、後掲の「御判物類写」にも写が載る。
- (40) 福長4―262。
- (41) このときの調査については、筒井東84あゝそ、高木145―148（仮番号）に依る。
- (42) 前掲・伊藤孝幸「本学による高木家文書購入の顛末」二三〇―二三二頁。『養老郡志』（岐阜県地方改良協会養老郡支会、一九二五年）。筒井東84た・ち・つ。
- (43) 前掲『岐阜県史 史料編 古代・中世Ⅱ』、『岐阜県史 史料編 古代・中世 補遺』（岐阜県、一九九九年）、『岐阜県史 史料編 近世Ⅱ』（岐阜県、一九八二年）。
- (44) 中央義士会編『赤穂義士史料』下巻（雄山閣、一九三一年）一六二頁。なお、同書は渡辺世祐の校訂になる。
- (45) 東京帝国大学文学部史料編纂掛編纂、朝陽会、一九二二年。
信長書状および次の豊臣秀吉朱印陣立書については『織田信長と岐阜』（岐阜県歴史資料館、一九九六年）を参考にした。
- (46) 付記 本稿は科学研究費補助金・基盤研究（B）「旗本高木家文書を中心とした分散資料の統合と共有化に関する研究」（課題番号15H03237、研究代表者・石川寛）による研究成果の一部である。
- (47) 特に東家所蔵文書の撮影については格別の尽力を得たことを深謝している。なお、東家への依頼状は「筒井東84て・な」になる。
- (48) 高木家152―153（仮番号）。ただし『織田信長公三百六十年忌記念展覧会図録』（名古屋市役所、一九四二年）に高木家所蔵文書は収録されていない。
- (49) 高木家162（仮番号）。
- (50) 吉田義治「館蔵史料「豊臣秀吉朱印陣立書」の紹介」（『岐阜県歴史資料館報』二八、二〇〇五年）。
- (51) 高木家145い・う（仮番号）。
- (52) 高木家150・151（仮番号）。
- (53) 高木家154―157（仮番号）。『豊公大展覽会図録』（便利堂、一九四三年）。なお、図録等において高木貞元を「貞光」と間違って記載している。
- (54) 『京城府史』全三巻（京城府、一九三六・四一年）。
- (55) 筒井東84に。
- (56) 国民新聞社・高橋源一郎の書状より（筒井東84は）。書状は年月日を欠くが、史料編纂掛が借用しているときに原本を拝見したものと思われる。
- (57) 付記
- (58) 本稿は科学研究費補助金・基盤研究（B）「旗本高木家文書を中心とした分散資料の統合と共有化に関する研究」（課題番号15H03237、研究代表者・石川寛）による研究成果の一部である。